

春爛漫の4月、岡山と香川を結ぶ瀬戸大橋の開通20周年を記念して、自動車をすべて通行禁止にしての大きなマラソン大会（15 km）が開かれた。5,000名のランナーとともに、車の通らない瀬戸大橋上を走ったあと自宅に戻り、一息ついたところでこの編集後記を書いている。今月号の「扉」には香川大学の田宮 隆先生による「まんでがん」が掲載されている。田宮先生が述べられているように、大橋のおかげで、岡山と香川の交通は（というより中国と四国の交通は）本当に便利になり、香川での緊急手術の呼び出しでも岡山から1時間でたどりつけるようになった。その大橋の上を走りながら眺める瀬戸の島々の美しさはまた格別のものであった。以前は、「まんでがん」の心意気で走っていたが、今は健康のため楽しみながら走ることにしている。今月号は手術手技欄に渡邊学郎先生による「弁蓋部神経膠腫の手術」、総説欄に中里洋一先生による「脳腫瘍のWHO新分類」をはじめ読み応えのある論文が多数掲載されている。

学会の主催者がいろいろ悩むことの1つがその会のテーマの決定であろう。本年春の「脳卒中の外科学会」と「脳神経外科手術と機器学会」では、多少の表現の違いはあるものの、たまたま両学会とも「技術の継承」がメインテーマとなった。脳神経外科のような外科系では、内科系とちがって理論だけではものが片づかず、「徒弟制度」「手取り足取り」「見て盗め」などのキーワードで示されるような独特の技術の継承が大切な要素である。両学会の「技術の継承」のセッションでは、実際の手術室での on the job training 以外に、手術室の外で行う off the job training の演題が多くみられた。

卓上マイクロ顕微鏡とシリコンチューブ、ガーゼなどを用いたマイクロ下での吻合練習でも、何万針のレベルまで続けると、通常のマイクロ操作自体も自然体でできるようになることを、若手の先生が発表している。このような練習は決して吻合術のためだけというわけではなく、あらゆるマイクロ操作をスムーズに行うためのものである。私の教室でもいくつかのセットを医局にそろえ、いつでも練習できるようにしている。必ずしも若手にそのことが十分認識されているわけではなく、ベテランが手術の前の日に手慣らしをしていることが多いのだが。

素晴らしい吻合練習の発表をされていた先生に手紙をさしあげ、そのDVDを送っていただき、さっそく当科の医局会で見せた。送ってくださった先生によると、通常の動脈瘤や脳腫瘍の手術でも、その場その場での判断には手術室での経験の積み重ねが必要とは感じているものの、吻合練習を3万針、5万針と繰り返した結果、少なくとも、顕微鏡下で手先が意のままに動くようになったという、そのことを皆に強調して説明した。

その日の医局会が終わり、帰宅する前に戸締まりのチェックをしていると、卓上顕微鏡をおいてある図書室のほうで何か人の気配がする。ふとのぞいてみると、今年入局した若い医師たちがさっそく練習をしているではないか。せっかく買っている、若い医師にあまり使われているのを見たことがなかった顕微鏡であるが、上述した練習のDVDとその意義について説明したことが、これから専門医を目指そうという若者にはやはり相当刺激になったようである。鉄は熱いうちに打て、というが、私たちの指導の一言一言が若い医師には非常に重く響くことを再認識した次第である。